

誠実なる探究者

斎藤 昭二

*Here rests his head upon the lap of earth
A youth to Fortune and to Fame unknown,
Fair Science frowned not on his humble birth,
And Melancholy marked him for her own.*⁽¹⁾

I

歴史は基本的には勝者の視点から見た記述の集積であり、敗者または無名の者の声なき声が反映されることは概して少ない。文学史も同じであり、時代の脚光を浴びながら表舞台で華々しく活躍し、大きな仕事を成し遂げる作家もいれば、人知れず自ら考えたい問題だけを自らのペースで考え、ほとんど無名のままで終わる作家もいる。

前者の例としては、たとえば T.S.エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) が挙げられる。西部ミズーリ州セント・ルイスの名門エリオット家に生まれ、ハーヴァード大学哲学科の助手になり、博士論文を纏めるために留学したイギリスで第1次世界大戦の終戦を迎える。彼の地に留まり、後に帰化。英国国教会に改宗。権威ある *Times Literary Supplement* の無署名の記事を書く。自ら作り出した「感受性の分裂 (dissociation of sensibility)」や「客観的相関物 (objective correlative)」等の用語は人口に膾炙し、長詩 *The Waste Land* (1922) によって全世界の詩的風土を一変させてしまう。評論家としても健筆を振り、1948年ノーベル文学賞も受賞する。内面はともかく⁽²⁾、作家としては表舞台を華々しく活躍したと言える。

後者には例えばエミリー・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86) がいる。マサチューセッツ州アマーストの清教徒の家庭に生まれ、生涯この地をほとんど離れることなく、詩作に耽る。しかし、それらは発表することをほとんど意図せずに書き連ねられたもので、タイトルさえ付けられ

ていなかった。従って、生前は作家としてはほとんど無名のままで終わったと言ってよい。幸い彼女の場合、遺稿がT.H. Johnson ed., *The Poems of Emily Dickinson* (1955) 2巻本等の形で出版され、今では現代アメリカ文学で最も重要な作家の一人であるとの地位を不動のものとしてはいるが。

マーク・ラザフォード (Mark Rutherford, 1831-1913; 本名 William Hale White) もまた後者の一例として加えることができるかもしれない。小作家であるために、大きな文学史でもせいぜい数行から半ページ程度の言及しかないくらいである。生前も、聖職者を志し入学した New College では聖書の解釈が異端視され、査問委員会にかけられて放校処分となった。また「非国教徒 (Dissenter, Nonconformist)」であったため出世は望めず、静かな役人生活を定年まで送らざるを得なかった。しかしその間、自らの考えたい問題を自らのペースで地道に考察を進め、それらを数編の書籍と翻訳の形で残している。

しかし、大切なことは果たした仕事の絶対的な大小ではなく、各人が与えられた環境の中でどれだけ誠実に自らの問題と向き合い、それらの考察をたとえ僅かでも一歩先に進め得たかということではないだろうか。小さな仕事でも、誠実な仕事には、人の心は動かされる。それではマーク・ラザフォードはどのような仕事をしたのだろうか。

II

例えば、*Atonement* という作品がある。この「贖罪」という重いテーマに対してラザフォードが提出したのは、お定まりの神学論争ではなく、わずかB6版テキスト⁽³⁾で4ページにも満たない短編小説である。

19世紀の末もしくは20世紀初頭のイギリスのある家。暖炉を前にしてその家の主人と客と思しき人物が話している。主人は片足。そのことを客が尋ねたのであろう、「どうして私が足を失くしたかとお尋ねなのですね。」という言葉でこの物語は始まる。この疑問は、暖炉の前に寝そべる一匹の汚い雑種の犬をどういう経緯で手に入れたのかを話すと、その謎が解けるとして主人は次のような話を語る。

数年前、主人は家族を連れてウエストモアランド (Westmoreland) に休暇を過ごしに行った。飼い犬一匹を家に残して行くのは忍びないので一緒に連れて行く。ところが着いてみると毎日雨で外に出かけることもでき

ない。楽しみにしていた外遊びもできず、ロッジに閉じ込められる日々に家族は不満を口にこそしないけれど、無言の圧力があり、それに耐えかね彼はある午後激しい雨の降るなか外に出かけようとする。ところが、

My dog, a brown retriever, was lying on the mat just outside the door, and I nearly fell over him, "God damn you!" said I, and kicked him.⁽⁴⁾

戸口の外に寝そべっていた飼い犬に躓いて危うく転びそうになるという醜態をさらに晒すことになり、彼は一時の怒りに駆られ、決して口にはいけない言葉を発し、犬を蹴飛ばしてしまう。

「泥棒が入れば一撃のもとに倒してしまうであろう」大きなレトリバー犬であったけれど、犬は唸り声をあげることなく痛みに耐え主人の散歩に静かについてくる。

いつもの散歩では名前を呼ぶと喜んで前を歩く犬がその時に限って姿を現さないことにさらに怒りを覚え、来た道を戻ってみると、ほどなく道の傍らに犬が死んで横たわっているのを発見する。その時になって彼はそれまで自分に忠実そのものに従ってきた愛犬を一時の怒りに駆られて蹴とばし、殺してしまったことを初めて後悔する。

その日から彼の苦悶の日々が始まる。

For weeks I was in a miserable condition. A separate consciousness seemed to establish itself in this foot; there was nothing to be seen and no pain, but there was a dull sort of pressure of which I could not rid myself. If I slept I dreamed of the dog, and generally dreamed I was caressing him, waking up to the dreadful truth of the corpse on the path in the rain.⁽⁵⁾

休暇を終え、日常の生活に戻ってみても、昼間は蹴とばした足の方に鈍い感覚を覚え、その感覚はどうしても取り除くことができない。夜は必ずといっていいほど悪夢にうなされ、その中では横たわる犬を擦るが生き返ることはなく、雨の降るなか道端に横たわる死骸を確認するに至って目を覚ますといった日々が続く。贖罪、即ち罪の赦しは与えられないのである。

そのような苦悶の日々が続く中、帰宅途中のある晩

One night I was coming home late and heard the cry of “Fire!” I ran down the street and found a house in flames. The fire-escape was at the window, and had rescued a man, his wife and child. Every living creature was safe, I was told, save a dog in the front room on the ground-floor.⁽⁶⁾

偶々遭遇した火災現場で「犬を除けば全員無事です」という家族の言葉を聞いた途端に

I pushed the people aside, rushed in, half-blinded with smoke, and found him. I could not escape by the passage, and dropped out of the window into the area with him in my arms. I fell heavily on *that* foot, and when I was helped up the steps I could not put it to the ground. “You may have him for your pains,” said his owner to me; “he is a useless cur. I wouldn’t have ventured the singeing of a hair for him.”⁽⁷⁾

矢も盾もたまらず彼は中に飛び込み、犬を抱えて1階の窓から地階まで飛び降りる。そしてその代償としてその犬をもらう。

しかし、着地した例の足はひどく痛む。

I was in great agony, and when the surgeon came it was discovered that my ankle was badly fractured. An attempt was made to set it, but in the end it was decided that the foot must be amputated.⁽⁸⁾

足は複雑骨折していて切断せざるを得ないことが分かる。ところが意外なことに

I rejoiced when I heard the news, and on the day on which the operation was performed I was calm and even cheerful.⁽⁹⁾

切断という悲しいはずの診断を聞いた時には「喜び」、手術の当日には「心穏やかで陽気でさえあった。」のである。

一時の怒りに駆られ愛犬を蹴飛ばして殺してしまっただけで以来彼を肉体的にも精神的にも苦しめていた苦悶からようやく解放され、罪の赦しが与えられたのである。

では *Atonement* 「贖罪」と題されたこの物語によって作者 Rutherford は何を言いたかったのか。彼にとって「贖罪」とは何なのか、どういうことを指すのか。「贖罪」の原題は勿論英単語の *Atonement* であり、その語源は [at onement (一体となって) の短縮形。…]⁽¹⁰⁾ であり、その本来の意味は人間の始祖であるアダムとイヴが原罪を犯したことにより神から離反したという『旧約聖書』「創世記」中に見られるエピソードを背景にした […自分自身と再び一体になることは罪を償うことであった]⁽¹¹⁾ というキリスト教的なものであろうが、ラザフォードにとっては [at one ment, 一つになること→同じになること] であり、物語に即して言えば「人間は犯した罪と等価のものを失うことによって赦される」という峻厳なものであったと考えられる。一時の怒りによって犬を蹴飛ばして殺してしまったら、その足も死ぬ、即ち切断されて片足になることによってのみ赦されるのである。

Ⅲ

もう一例 *Conscience* を見てみよう。人間にとって「良心」とは何なのか。良心的な行動とは何なのか。生きる上で本質的かつ根本的なこの問いに対してラザフォードは上記のB6版テキストで5ページにも満たない短編で答えている。

物語の舞台は19世紀末もしくは20世紀初頭のイギリスのある家族の団欒。

“Conscience,” said I, “her conscience would have told her.”⁽¹²⁾

「良心。もしあの時彼女に良心というものがあつたなら、彼女に（取るべき行動を）語りかけていたことでしょう。」と始まるが、これを裏返して言えば、あの時彼女が取つた行動は良心的なものでなかったということになる。これを受け、「私」の祖母が

“Conscience,” said my grandmother musingly (turning to my father.) “You will remember Phyllis Eyre? She was one of my best friends, and it is now two years since she died, unmarried…⁽¹³⁾

と話を繋ぎ、この「2年ほど前、結婚もせずに亡くなったフィリス・エア」についての思い出話が続いて語られる。

フィリス・エアは Sir Robert Walsh 家の家庭教師 (governess) であったが、美しく聡明で、何よりも信仰心の篤いところが気に入られ、子供たちが成人した後も屋敷に留まって子供たちの相談相手になって欲しいと頼まれ、引き続き Walsh 家に残っていた。

長女娘の Evelina が21才になった時、兄の友人の Charles Fysshe が屋敷に遊びに来た。チャールズは Fysshe 家の御曹司、背が高くてハンサムで信仰心が篤く、やがて Fysshe 家の家督を相続することになるお金持ちである。

…Phyllis soon discovered, or thought she discovered, that he was in love with Evelina. He seemed to court her society, and paid her attentions which could be explained on one hypothesis only. Phyllis was delighted, for the match in every way was most suitable, and must gladden the hearts of Evelina’s parents.⁽¹⁴⁾

チャールズとエヴェリーナは互いのことが気に入り、恋に陥ったとフィリス・エアの目にも映り、誰もが二人の結婚を期待し望んだ。あらゆる面で釣り合いが取れ、理想的なカップルであったから。但し、エヴェリーナは慎み深く、自分で決断を下すことができない性格であったが、そんな折日もフィリス・エアは「あの人なら大丈夫。」と後押しをした。

6週間ほど滞在し、秋にまた遊びに来ると約束してチャールズが帰ってからも、女たちの話題は素敵でチャールズのことで持ち切りであった。

いつものようにチャールズの話題で盛り上がり、フィリス・エアも彼のことを褒め、自室に戻ったある晩

One evening, after she had reached her own room and had lain down to sleep, a strange apparition surprised her. It was something more than a suspicion that she herself loved Charles.⁽¹⁵⁾

寝ようとして身を横たえた瞬間に「他ならぬ自分自身がチャールズを愛してしまっているのではないか」という恐ろしい考えが浮かんでしまった。

She strove to rid herself of this intrusion: she called to mind the difference in their rank; that she was five years his senior, and that if she yielded she would be guilty of treachery to Evelina. It was all in vain; the more she resisted the more vividly did his image present itself, and she was greatly distressed.⁽¹⁶⁾

頭に浮かんだ恐ろしい考えを取り除こうと努めれば努めるほど益々彼の存在感が大きく消し去り難くなっていった。

そんな悶々とした日が過ぎ、秋になってチャールズが戻ってきた。彼女は辛くて彼と顔を合わさないようにしていた。キツネ狩りの行われる朝も頭痛を口実に屋敷に残った。11月の美しい日で、心を持って余した彼女はひとり森の方に散歩に出かけた。すると驚いたことに森に入るところにチャールズが立っていた。ぎこちない言葉をいくつか交わした後にチャールズが意外なことを口に始める。

“ I wanted to speak to you, Miss Eyre. I wonder if you have suspected anything lately.”

“ Suspected? I do not comprehend: you are very vague.”

“ Well, must I be more explicit? Have you fancied that I care more for somebody you know than I care for all the world besides? I suppose you have not, for I thought it better to hide as much as possible what I felt.”

“ I should be telling an untruth if I were to say I do not understand you, and I trust you will pardon me if I tell you that a girl more worthy of you than Evelina, and one more likely to make you happy, I have never seen.”

“ ‘Gracious God! What have I done? What a mistake! Miss Eyre, it is you I mean; it is you I love.’⁽¹⁷⁾

「最近、何かお気づきではないですか。」との奇妙な問いに、当初はエヴェリーナのことを言っているのだと思いながらも、探るように言葉を交わしていくと、最後の場面で「僕が愛しているのは、エアさん、貴女なのです。」という衝撃的な言葉を耳にする。その言葉を聞いた途端、一瞬の躊躇いもなく彼女は応えた。「あなたとは結婚できません。気持ちが変わることは絶対にありません。尊敬は致しますが、愛することはできません。」と言って、彼の元を離れた。

“ ‘She parted from him abruptly, but no sooner had she left him than she was confounded, and wondered who or what it was which gave that answer. She wavered, and thought of going back, but she did not.’⁽¹⁸⁾

「あのような答えをしたのは誰なのか、何なのか」、戻ってみたいという本心の通りにさせなかったものは何なのか。

「良心」の原語は *conscience* であり、この言葉の語源は「< F < L *conscientia* knowledge < *conscire* know well」⁽¹⁹⁾ であるので、良心的な行動とは「自分の気持ちや本心という内心の声に謙虚に耳を傾け→自分の心をよく知る」ことから始まるというのがラザフォードの考え方であり、物語中のフィリス・エアはそれをせず、無自覚的に外在的な価値観に従って行動してしまった。それでは決して良心的な行動とは言えない。

その後チャールズはエヴェリーナと結婚し「喧嘩もせず、子供を5人も設ける」が、語り手である「祖母」の目には「それは幸福な結婚と言えるものではなかった」という後日談がついてこの物語は終わる。

IV

「罪」「赦し」「良心」といった問題は太古の昔から人が生きる上で本質的かつ根本的な問題であり、「贖罪」となれば、キリスト教の教理史に神学論争が数多く残るまさに中核的な問題でもあるので、それらを扱った書

籍は古今東西万巻に上ることであろう。しかし、ラザフォードはそうした既成の概念に頼ることは一切せず、自らの頭で「始めに言葉ありき」(旧約『創世記』1章1節)に戻り、ことばの語源に戻って誠実に考察を進める。

得られた結果としては、「贖罪 (atone ment)」とは「*at one ment* (一つになること)」で、自らが犯した罪と等価のものを自ら失うことで得られるのであり、「良心」とは「*con sci ence* (よく知ること)」で、自らの内心の声に無心に耳を傾け、自らの心をよく知ることから始まるという謙虚なものなのかもしれない。しかし、飾りのない質素なものであるからこそ却って峻厳な重みを持つように思われる。

ラザフォードは『自伝』の中で「私の人生は決して解決することができなかった数多くの問題に苛まれた平凡極まりないものであった (But mine is the tale of a commonplace life, perplexed by many problems I have never solved;⁽²⁰⁾)」と言っているが、その「富や名声とは無縁な⁽²¹⁾」生き方や誠実な考察の軌跡はいつの時代でも、たとえ僅かでも心ある読者を捉え続けていくことであろう。

註

- (1) Thomas Gray, *Elegy Written in a Country Churchyard*, THE EPITAPH, ll. 1-4.
- (2) イギリスで恋に落ち結婚した妻 Vivienne は精神を病み、その心労に帰因する闘病のためにスイス・ローザンヌで過ごした折りに長詩 *The Waste Land* の草稿を書き始めている。
- (3) 渡辺美知夫 (編), 「ラザフォード短篇集」(研究社小英文叢書, 1974)。以下テキストの引用は本書による。
- (4) 上掲書, p. 1, ll. 20-22.
- (5) 上掲書, p. 3, ll. 2-8.
- (6) 上掲書, p. 3, ll. 14-19.
- (7) 上掲書, p. 3, ll. 19-26.
- (8) 上掲書, p. 3, l. 29-p.4, l. 1.
- (9) 上掲書, p. 4, ll. 1-3.
- (10) 「英和辞典」(小学館, 1981), p.120 atone ment の語源説明。
- (11) 同上

- (12) 上掲書, p. 5, ll. 1-2.
- (13) 上掲書, p. 5, ll. 11-14.
- (14) 上掲書, p. 5, l. 26-p.6, l. 4.
- (15) 上掲書, p. 6, ll. 24-27.
- (16) 上掲書, p. 6, l. 27-p.7, l. 1.
- (17) 上掲書, p. 8, l. 19-p.9, l. 2.
- (18) 上掲書, p. 9, ll. 7-10.
- (19) 「英和中辞典」(旺文社, 1987), p.429 conscience の語源説明。
- (20) Mark Rutherford, *The Autobiography of Mark Rutherford* (T. Fisher Unwin, 1881), p.1.
- (21) Thomas Gray, *op.cit.* l. 2.